

2. 事業の概要と成果

(1) 上位目標の達成度

ミッドランド州ゴクウェ・ノース地区において、学校に通っている子ども、通えていない子どもに関わらず、それぞれにあったかたちで必要な教育を受けられるようになる。

事業開始前、ネニユンカ中学校の1校舎を除き、対象4校には、藁やトタン屋根だけの教室があるのみで、子どもたちは木のベンチやレンガ、地べたに座って授業を受けていた。壁がないため砂埃が教室の中に吹き込み、授業に集中しづらく、雨の日には授業がキャンセルになっていた。しかし、政府の規格に合った校舎が完成し、子どもたちは安全に安心して学習に集中できるようになった。

さらに、対象4校では、本事業で建設した校舎だけではなく、教育環境をさらに改善するための取り組みが始まっている。下の表1の通り、2017年と2018年を比べると、柱と屋根だけの教室の数が減り、政府規格内の校舎と建設中の校舎の数が増えている。

表1：校舎と教室の数と質の変化

学校名	政府の規格内の校舎		建設中の校舎		柱と屋根だけの教室	
	2017	2018	2017	2018	2017	2018
セブジュール小学校	0	1	1	1	8	5
ンガザナ小学校	0	1	1	1	6	4
サバラ小学校	0	1	1	2	9	7
ネニユンカ中学校	0	1	1	2	2	2
合計	0	4	4	6	25	18

*ネニユンカ中学校には、事業開始前に、住民たちが作った校舎が1つあったが、政府の規格に沿ったものではないため、2017年の政府規格内の校舎は0としている。なお、この校舎は2017年に強風のため屋根が飛び、現在は使用されていない。

また、対象小学校3校で、これまで学校に通っていなかった子どもたち117人が特別クラスに参加し、学校に通うようになった。子どもたちは、読み書きや計算、生計スキルだけではなく、学校生活で社会性も学ぶことができている。

さらに、対象小学校3校において、通常学級に通う生徒の数が増加した。これは、地域の子どもたちや保護者が、学校で学ぶことの意味に対する理解の現れといえる。例えば、ンガザナ小学校の校長によると、2018年度は遠方のブルレ小学校からの転校生が増えたという。これまで、整備されたブルレ小学校に7kmかけて通学していた生徒たちが、より近隣の設備が整えられたンガザナ小学校に通うようになったからである。現在、子どもたちは、毎日徒歩で往復14kmの道のりを歩くことなく、より自宅に近い学校に通うことができる

ようになった。校舎が完成したことにより、子どもたちが安全に通学できるようになった。下の表2は、3校の通常学級の生徒の数と増加数である。

表2：3校の在校生の数と比較

学校名	2017年3月	2018年3月	増加数
セブジュール小学校	411	478	67
ンガザナ小学校	362	461	99
サバラ小学校	714	794	80
合計	1,487	1,733	246

対象4校の内3校の学費収入が増加した(表3参照)。この背景には、保護者の学校教育への関心と期待、教育の質とサービスへの満足度が向上したためであると考えられる。ただし、学費の支払いは、その年の農作物の出来高とその収入にも大きく影響されるため、必ずしも上記の理由が全てだとは言いきれない。

表3：支払われた学費と増減

学校名	2016		2017		増減
	収入 (ドル)	回収率 (%)	収入 (ドル)	回収率 (%)	収入 (ドル)
セブジュール 小学校	909.00	6.2	4,656.00	31.7	3,747.00
ンガザナ 小学校	6,517.53	40.6	6,734.00	36.4	216.47
サバラ 小学校	4,914.00	22.1	11,379.50	47.8	6,465.50
ネニユンカ 中学校	6,027.40	46.3	6,713.25	54.1	685.85
合計	11,850.40		22,748.75		10,898.35

*回収率の計算方法：支払われた学費 ÷ (学費 × 在校生) × 100

(2) 事業内容

(ア) 校舎建設

4校舎（合計8教室）を建設した。

1. 地域住民から49人の建設作業員を雇用した。彼らが工事にあたり人手が必要な時には、地域住民が作業を手伝った。
2. 32人の建設作業員に校舎建設のための基礎工事研修を行った。
3. 各学校の地域住民が砂や砂利、水など、建設に必要な資材を自分たちで調達した。調達方法は、牛に荷車を引かせたり、ロバを使ったり、住民が頭に載せて歩いて運んだりとさまざまであった。
4. 地域住民が校舎建設に必要な110,854個のレンガを作った。各学校のレンガの数は次の表4の通り。

表4：各学校が作ったレンガの数

学校名	レンガの数
セブジュル小学校	27,000
サバラ小学校	30,000
ンガザナ小学校	27,154
ネニユンカ中学校	26,700
合計	110,854

5. 校舎の維持管理に関する研修を実施した。参加者は4校で89人であった。

<参加者内訳>

生徒・児童18人、教員16人、学校開発委員17人、建設作業員29人、地域のリーダー6人、政府行政機関職員3人（合計89人）

6. 各校舎はそれぞれの工程で14回の規格検査を受け、完成後、政府の規格に合った校舎として認められた。

(イ) 学校開発委員会のキャパシティー・ビルディング

1. 4校で学校の課題や学校開発の必要性、校舎建設における関係者の役割と責任について話し合い、確認するためのワークショップを実施した。教員、学校開発委員会、地域のリーダー、行政機関の職員など130人（男性107人、女性23人）が参加した。

<参加者の内訳>セブジュル小学校39人、ンガザナ小学校27人、サバラ小学校30人、ネニユンカ中学校31人、行政機関の職員3人（合計130人）

2. 4校で1年間の活動を振り返り、活動を改善するためのワークショップを実施した。校舎建設における関係者の

役割の再確認、成果や課題、2年目に向けたそれぞれの役割と計画について話し合った。参加者は、学校開発委員会、児童と生徒、教員、地域のリーダー、行政機関の職員など169人であった。

<参加者の内訳>

セブジュール小学校 44人、ンガザナ小学校 37人、サバラ小学校 38人、ネニユンカ中学校 36人、行政機関の職員 3人（合計 158人）

(ウ) 学校収入の向上

1. 4校で学校の収入を増やすための養蜂トレーニングを実施した。参加者は教員と学校開発委員会、児童・生徒（13人）、地域のリーダー、地域の農業普及員等 81人であった。

<参加者の内訳>

セブジュール小学校 19人、ンガザナ小学校 18人、サバラ小学校 21人、ネニユンカ中学校 19人、行政機関の職員 4人（合計 81人）

2. 8月、学校開発委員会と教員が巣箱を20個設置し（5個×4校）、巣箱を観察しながら、蜂が巣箱に入りやすくなるよう試行錯誤を重ねた。しかし、気温が非常に高く乾燥し、しばらく蜂の好まない環境が続いたため、数か月間巣箱に蜂は入らなかった。その後、ンガザナ小学校で2017年12月に巣箱に蜂が巣を作っているのを確認し、さらに、セブジュール小学校とサバラ小学校では2018年1月、ネニユンカ中学校では3月に蜂の巣が確認された。
3. 各学校から学校開発委員会1人と教員1人（2人×4校）、地域の農業普及員5人（合計13人）がゴクウエ・ノースの養蜂農家を訪問した。養蜂活動の視察だけでなく、参加者同士でこれまでの活動を振り返り、意見交換を行った。

(エ) 教育の重要性を伝えるワークショップ

1. 小学校3校の地域の大人と保護者を対象に、教育の重要性に関する話し合いを行い127人が参加した。

<参加者の内訳>

セブジュール小学校 30人、ンガザナ小学校 41人、サバラ小学校 56人（合計 127人）

2. 1.の話し合いの後、それをフォローアップするために、児童福祉員と学校が地域の大人や保護者に対し、子どもの教育の権利やそれに関する保護者の義務について説明し、学校に通っていない子どもたちを学校に通わせるよ

	<p>う働きかけた。</p> <p>(オ) 特別クラス（学校に通えていない子どもたち向け）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育省の職員が、小学校3校の校長に対し、特別クラスに関する政府の方針について説明した。また、クラスを担当する教員9人と校長が、特別クラスのカリキュラムや実施方法、注意点などについて確認した。 2. 117人（男子63人、女子54人）の子どもたちが特別クラスに登録し、通学した。子どもたちに制服一式と巾着袋、文房具を支援した。 3. 当初、クラスは午後2時から4時まで実施していたが、子どもたちがそれよりも早い時間に学校に来てクラスの開始を待ったり、クラスの時間が足りなかったりしたことから、開始時間を早めるなど、学校ごとに柔軟に対応した。これにより、特別クラスの子どもたちが通常学級の生徒と一緒に体育に参加するなど、他の子どもたちとの交流の機会が増えた。 4. 特別クラスの子どもたち69人とその保護者（子どもが11歳以下のみ）を対象に生計スキルトレーニングとして養蜂の研修を行い、270個の巣箱（90個 x3校）を支援した。 5. 特別クラスの子どもたちと保護者、担当教員が270個の巣箱を自分たちで組み立て、試行錯誤を重ねながら養蜂に取り組んだ。 6. 特別クラスを担当する教員13人と教育省の職員1人が活動を振り返り、進捗状況や課題、今後の改善策について話し合った。
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>(ア) 校舎建設</p> <p>4校に通う1,845人の子どもたちが天候などの影響を受けずに、政府の規格を満たす教室（各校2つ）で学習できるようになった。1つの教室には、60人分の机と椅子が設置されており、机と椅子を使って一度に授業を受けることができる人数は4校で480人となっており、全生徒数には満たない。だが、全校児童・生徒が交代で教室を使っているため、全校児童・生徒が裨益しているといえる。</p> <p>(イ) 学校開発委員会のキャパシティ・ビルディング</p> <p>4校の学校開発委員会、教員、生徒、地域のリーダーおよびゴクウェ・ノース地区の行政職員が、各校の抱えている課題を明らかにし、2年目の施設建設のための計画を立てた。その計画には、完成までの工程と時期、各関係者の役割と責任などが含まれている。その計画は、地域のリーダーを通じて</p>

地域住民にも共有され、地域が一丸となって学校の環境整備に取り組む姿勢を見ることができた。ワークショップは各校で2回ずつ実施し1回目の4校の参加者の合計は130人（学校開発委員会のメンバー34人、地域のリーダー52人、郡の行政職員3人、村の行政職員4人、保護者29人、教員8人）、2回目は158人（学校開発委員会のメンバー30人、地域のリーダー32人、郡の行政職員3人、村の行政職員9人、生徒24人、教員19人、保護者41人）であった。なお、当初想定していた対象者52人（学校開発委員会のメンバー36人（9人×4校）、地域のリーダー8人（2人×4校）及び行政職員8人（2人×4校））は、1回目93人、2回目74人と、両回とも超える参加があった。

(ウ) 学校収入の向上

4校の学校開発委員会と教員が養蜂に関する知識を身につけ、実践した。しかし、気温が非常に高く乾燥し、蜂の好まない期間が続いたため、しばらく巣箱に蜂が入らず、巣ができなかった。そのため、本事業期間内に養蜂から収入を得ることはできなかった。現在20個の巣箱の内12個に巣が出来ており、6月に収穫を予定している。なお、収穫率をあげるための改善策は下記のとおり。

- ・学校開発委員会が中心になり、月例ミーティングを行う。
- ・手作りの屋根を設置し、乾季の直射日当を避けるようにする。
- ・向日葵などの植物を植え、蜂が採蜜できる環境を増やす。
- ・現在抱えている課題に対して、他の養蜂家と意見交換を行い、解決策等を練る。

収入を得られるほどの十分な採蜜量がまだ確保できていないため、現在箱に蜂が入っている割合を以下に明記した。ちなみに、表5は学校開発委員会の巣箱で、表9は特別クラスの子どもたちが管理する巣箱である。

表5: 学校開発委員会が管理する蜂の巣が入っている巣箱の数（5個中）

学校名	巣が入っている巣箱の数	割合
セブジュル小学校	2	40%
ンガザナ小学校	2	40%
サバラ小学校	5	100%
ネニユンカ中学校	3	60%
合計	12	60%

(エ) 教育の重要性を伝えるワークショップ

ンガザナ小学校がある 28 区、セブジュール小学校がある 30 区及びサバラ小学校がある 31 区の 3 つの地域で、学校に通っていなかった子どもたち 117 人が特別クラスに登録した。さらに、特別クラスの子どもたちだけではなく、3 校に通う通常学級の生徒の数も増加した。これは、保護者が教育の重要性を理解したことによると考えられる。ワークショップは各校で 1 回ずつ実施し 3 校の参加者の合計は 127 人であった。また 90 世帯 (198 人) を対象に家庭訪問を行った。ワークショップと家庭訪問合わせ、合計 325 人に教育の重要性を伝えた。なお、参加率をあげるための改善策は下記のとおり。

・重要性を伝えるワークショップのみでは、教育に関心がある保護者は集まるが、興味関心があまりない保護者は学校に来にくいため、スポーツ大会を利用して人を集めるなど、異なる方法で参加者を増やす。また、人を集めるだけでなく、大人が自分達の言葉で教育の重要性を伝える劇を披露するなど、効果的にメッセージを届けるようにする。

表 6 : 3 校の特別クラスの登録者数

学校名	特別クラスの登録者数		
	男子	女子	合計
セブジュール小学校	21	18	39
ンガザナ小学校	16	14	30
サバラ小学校	26	22	48
合計	63	54	117

表 7 : 3 校通常学級の児童の増加率 (2017 年 3 月と 2008 年 3 月比較)

学校名	増加率
セブジュール小学校	16.30%
ンガザナ小学校	27.34%
サバラ小学校	11.20%

(オ) 特別クラス (学校に通えていない子どもたち向け)

3 つの小学校の特別クラスに通う子どもたちの読み書き・計算など基本的なアカデミックスキルが向上した。セブジュール小学校では、特別クラスの子どもたち全員がシヨナ語 (ジンバブエの主要言語) を読めるようになり、4 人の子どもが英語を読めるようにもなった。また、文字を右から書いていた子どもたちもいたが、左から書けるようにもなった。しかし、中間テストの点数で 50% 以上を取った子どもの割合は 3 校とも 80% 以下となった (表 8 参照)。なお、合格率をあげるため

の改善策は下記のとおり。

・各レベル内での学力差がある子どもたちへの教え方、子どもの意欲を引き出す方法に困っている教員もいるので、毎学期末ごとに振り返りワークショップを開催する。そのなかで教員が抱える問題や成功体験を教員同士で共有し、また教育省の行政職員からの意見をもらうことで教員へのサポートを増やす。また、最高学年で卒業試験を受ける生徒に対しては、学校の休み中に教員が学校を開き、特別指導を受けられるようにする。

表 8：特別クラスの間接テストで 50%以上を取った子どもの割合

学校名	合格点（50%）以上を取った子どもの割合					
	レベル 1		合計	レベル 2		合計
	男子	女子		男子	女子	
セブジュール小学校	71%	66%	69%	16%	33%	25%
ンガザナ小学校	80%	77%	79%	100%	50%	75%
サバラ小学校	14%	4%	9%	29%	0%	15%

*1 それぞれ子どもたちの理解度や学習レベルが違うため、各学校で中間テストを作成した。そのため、学校によってテストの難易度と結果が異なっている。

*2 特別クラスの子どもたちは、学習レベルによって 1 から 3 までクラス分けされた。レベル 1 が小学校 0～3 年生まで、レベル 2 が小学校 4～5 年生、レベル 3 が小学校 6～7 年生（最終学年）に相当する。

また、3 つの小学校の特別クラスに通う子どもたちが生計スキル（養蜂）を身につけ実践した。しかし、本事業期間内に、養蜂から収入を得ることはできなかつたので、次の表 9 の通り巣箱には巣ができている現状を表で表した。6 月から収穫を予定している。

表 9：特別クラスの子どもが管理する蜂の巣が入っている巣箱の数（270 個中）

学校名	巣が入っている巣箱の数と割合	
	数	割合
セブジュール小学校	12	13.33%
ンガザナ小学校	25	27.78%
サバラ小学校	36	40.00%
合計	73	27.04%

	<p>「持続可能な開発目標(SDGs)に該当する目標における成果</p> <p>本事業は、目標 4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」に貢献した。</p> <p>校舎の建設により、児童・生徒がより質の高い教育を受けることができるようになった。完成した校舎の出入口は、スロープを設置しており、障がいを持った子どもたちにとっても利用しやすい作りとなっている。また、本事業により、学校に通っていなかった子どもたちも教育を受けられるようになった。</p> <p>さらに、行政機関と協力し、職業訓練学校から 4 校に講師を招き、土木建築に関する特別講義を開始した。本事業に関わった建設作業員 34 人が受講しており、彼らの生涯学習の機会を促進した。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>(ア) 校舎建設</p> <p>校舎の維持管理のための研修を学校開発委員会、教員、生徒、地域のリーダーを対象に行った。日頃、生徒や教員が校舎を使うため、彼らが日々維持管理を行い、破損や損壊に気づいた際には、校長に連絡する役割を担う。そして、校長が学校開発委員会にそれを報告し、学校開発委員会が対応する。校舎の維持管理の最終的な責任は学校開発委員会が担う。さらに、今後は学校開発計画の中に、校舎の維持管理も含まれる。校舎は定期的に塗り替えられ、5 年おきに大がかりな修繕が計画される。修繕のための費用は準備金として貯められ、学校開発委員会が取り組んでいる養蜂による収入も学校の維持管理に活用される。また、校舎の規格検査を担当する行政機関の職員が、定期的に学校を訪問し、状態を確認し、必要な指導を行う予定である。</p> <p>(イ) 特別クラス</p> <p>特別クラスの保護者は教育の重要性を理解し、子どもたちを継続して学校に通わせることを望んでいる。養蜂による収入を使って、特別クラスを担当する教員の手当を支払い、子どもたちの制服を買い替え、文房具を購入することを計画している。また、養蜂以外にも、学校と保護者が協力し、自分たちで特別クラスを継続するための活動も始まっている。サバラ小学校では、特別クラスの保護者が 1 羽ずつ鶏を持ち寄り、養鶏活動を開始した。その収入を、特別クラスに掛かる費用に充てることを予定している。</p> <p>(ウ) 収入向上活動(養蜂)</p> <p>1 年目の事業期間内には、養蜂から収入を得ることはできなかった。しかし、蜂が巣をつくった巣箱の数は増えており、</p>

	<p>今後、収穫量と収入が増える見込みである。本事業の2年目には、学校開発委員会と特別クラスの子どもたち、その保護者が養蜂活動の振り返りを行い、日々のモニタリングと管理方法、収穫時の技術を学ぶための研修や、収入を増やすための付加価値商品について学ぶための研修を予定している。さらに、地域の農業普及員との連携を強化し、より頻繁にかつ定期的に技術的な指導を受けられるようにする。これらの取り組みにより、養蜂による収入が増え、活動が継続することを見込んでいる。</p>
--	---